

<新連載>対人援助学マガジン No. 65

70の手習い・めいきんぐ

横書き都々逸

①

そだちと臨床研究会

川畑 隆

手のひらはストレッチ
でも指先は窮屈じゃない
めぐりあえたかもしれない

それに眠っていたギターケース
もしやと叩き起こしてみたら
なんとピッタリ納まってくれる
会うべくして出会えたギター
ようこそ私のもとへ

手のひらはストレッチ
でも指先は窮屈じゃない
どうやらめぐりあえたようで (筆者)

都々逸 (どどいつ) への道のり

この『対人援助学マガジン』への「かけだ詩」、
「サイコロジー」、「私の頭の中のまだエンピツ」
の連載 (YOUTUBE に「ターチャンのオリジナルソ
ング」もアップしました) のあと、私の好きなこ
とを表せる機会をどう使わせてもらうか…。『対
人援助学マガジン』であることを忘れ気味ですが、
そこは対人援助学 (マガジン?) の懐の深さに甘
え続けることにします。

「かけだ詩」の続編の「まだある詩」か…。い
やそれじゃあ、せつかくの機会を埋めるだけにな
ってしまいます。マガジンへの連載はあきらめて、
他の人の詩に曲を付けた歌に新しく詩をつけか
えて、YOUTUBE に追加しようか…。

めぐりあえた

小さい手で太い指
ギターのネックが細すぎて
うまく弦を押さえられない
馴染む日を待っていたのに
手離すのが申し訳ない

リサイクルで入れ替わったギター
ちょっとネックの太い掘出し物

…てなことで新しいギターを手に入れ曲を奏で
ながら詞を思い浮かべたのですが、今ひとつ気持
ちがのりません。それではと久しぶりにウクレレ
を持ち出して手に取っても、忘れたコードを覚え
なおすのが面倒くさいのです。

そんなふうのりきれない自分と“在庫”の範
囲に頼る窮屈さも感じはじめながら、いろいろと
思い巡らしていたら、浮かんできたのがナント
昔々、島倉千代子が唄ってた (東海林太郎も唄っ
てたけど、さすがにセリフは女性…)、思いもか
けないこの歌 (とってつけたようでスママセン)。

すみだ川

佐藤惣之助 作詞

山田 栄一 作曲

銀杏がえしに 黒繻子かけて
泣いて別れた すみだ川
思い出します 観音さまの
秋の日暮の 鐘の声

(セリフ) ああそうだったわねえ、
あなたが二十、わたしが十七の時よ。
いつも清元のお稽古から帰って来ると、
あなたは竹谷の渡し場で待っていて
くれたわねえ。そして二人の姿が

水にうつるのを眺めながら
にっこり笑って淋しく別れた、
ほんとはかない恋だったわね…。

(以下の詞とセリフは省略)

児童相談所職員だった若い頃の私の宴会芸の十八番で、当時、聴いてくれた人は私のこのセリフが面白かったみたいでした。

そしてこの「ああそうだったわねえ」につられてすっかり日本調の気分を取り出したのが、1枚のLPレコード「三亀松粋な世界～色模様花の吉原、東海道中膝栗毛、国定忠治～実況録音盤」でした。柳家三亀松…明治生まれで、大正末期から昭和時代に三味線を弾きながらの“漫芸”(話芸)で売れっ子だった人です。そしてその話芸に登場するのが“都々逸”。

俳句は五・七・五で、短歌は五・七・五・七・七ですが、都々逸は三味線を伴奏に唄う、七・七・七・五(つまり二十六文字。五・七・七・七・五は「五冠り」と呼ばれる)の歌で、江戸時代に庶民の間で広まったようです。初代都々逸坊扇歌(どどいつぼうせんか)という寄席芸人が、男女間の恋愛感情を歌って(情歌)始まり、次第に他のことがらも題材にされるようになりました。坊扇歌は「上は金 下は杭なし 吾妻橋 …」という都々逸を詠んで、政治や社会を批判したとして幕府の怒りを買って、四十八歳で亡くなるまで江戸から追放されていたという話です。

「立てばしゃくやく 座ればぼたん
歩く姿は ゆりの花」

「ざんぎり頭を 叩いてみれば
文明開化の 音がする」

…これも都々逸ですとよく例示されますが、坊扇歌作とされているのが、

「あきらめましたよ どうあきらめた
あきらめきれぬと あきらめた」

「こうしてこうすりゃ こうなるものと
知りつつこうして こうなった」

などで、聞いたことがあります。いいでしょ！

柳家三亀松のレコードに出てくるのは艶っぽいものばかりで、ここに書くのはちょっとはばかられますが、比較的無難なのをふたつ…。

「ほととぎす 粋な声して 一足とめて
手を出しやお前は 逃げるだろ」

「明けの鐘 ゴンと鳴る頃 仲直りして
すねた時間が 惜しくなる」

70の手習い

…それでちょっと私も都々逸に手を出してみようかと思ったのです。まだ今のところは三味線にまで手を出すかどうかはわからないのですが、「三味線かな？三線かな？やっぱり三味線だろう」と頭をよぎっているのも事実です。

在庫に頼るのではなく新しいことを始める…とは言っても在庫に頼る部分はあるわけですが、七・七・七・五に縛られる不自由じゃなくて自由を試してみたいと思います。

余韻

ジョギングの横を

高校生の集団が通り過ぎる

ひとりが柔らかく甘い声で

「ファイトです！」

その意味を時間差で聴き取る

そして慌てて

片手をあげて応える

でも手遅れ

(筆者)

「そういうことかと 気づいたけれど

気づいた時には 行っちゃった」

「私なんかじゃ 目もくれないと

思った私に 陽がさした」

「ファイトですよと 励まされたが

ステキですねと 言ってみろ」

…ええぞええぞ。簡潔でええ！

(了 2026.6)